

東日本支部だより

2024 年 3 月 7 日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

【改訂版 追加情報】第 139 回定例研究会につきまして、4番目の発表として王涵宇さんの発表が追加されました。詳しくは、「東日本支部 第 139 回定例研究会」(2 頁)をご覧ください。

今後の例会予定

第 138 回 定例研究会

2024 年 3 月 9 日(土)

オンラインによる開催

卒論・修論発表

(詳細は下記■定例研究会のお知らせ■を参照)

第 139 回 定例研究会

2024 年 4 月 13 日(土)

オンラインによる開催

卒論・修論発表

(詳細は下記■定例研究会のお知らせ■を参照)

第 140 回 定例研究会

2024 年 6 月 1 日(土)

オンラインによる開催

未定(研究発表ほか)

日時: 2024年3月9日(土) 13:00~16:00

開催方式: オンライン会議システムのZoom を使用し開催

※初めてZoom 例会に参加される方へ:参加にはWeb カメラとマイクのついたPC、またはタブレット、スマートフォンなどが必要となります。

参加方法:事前申込制。下記URL あるいはQR コードより申し込みフォームへアクセスし、事前に参加をお申し込みください。

<https://forms.gle/NYEFUiDZttQ17kZS9>

申込締切 3月6日(水)

ミーティングコード等は3月8日

(金)にお送りいたします。

※なお、本例会は当日に発表、

質疑応答ともにおこないます。



○卒業論文発表 (その 1)

1. 活動弁士による声のパフォーマンス —「金色夜叉」の映画説明に注目して—

船浦 佳歩 (東京藝術大学)

2. 現代における航空自衛隊音楽隊の課題 —航空中央音楽隊に焦点を当てて—

塚原 舞 (東京藝術大学)

3. マーチング(フロア・ショー)と観客の相互関係性 —観客の掛け声に着目して—

薮 春乃 (東京藝術大学)

4. アイルランドにおける旅するダンシング・マスターの社会的影響

千原 麻理香 (東京藝術大学)

ミーティングコード等は4月12日(金)にお送りいたします。

※なお、本例会は当日に発表、質疑応答ともにおこないません。

○修士論文発表 (その1)

5. 都市空間のなかの音楽 —東京在来音楽の近代化と〈江戸趣味〉—

内沼 愛香 (東京藝術大学大学院)

6. 越後瞽女唄の伝承とアイデンティティの様相 —現在の演奏活動に至るまでの変化に焦点を当てて—

齋藤 穂歌 (東京藝術大学大学院)

7. 『新撰讀美歌』(1890)の短歌体讀美歌における歌詞と楽曲の合致

平林 沙依子 (お茶の水女子大学大学院)

司会 鯨井 正子 (国立音楽大学)

○卒業論文発表 (その2)

1. 琵琶が与える「怪談的」イメージの形成過程について —「耳無芳一の話」を中心に—

明石 菜々実(東京藝術大学)

○修士論文発表 (その2)

2. 狂言歌謡「小舞謡」の音楽的特徴について —山本東次郎家の伝承を例に—

小林 雪乃(武蔵野音楽大学大学院)

3. ブルガリア民俗音楽における「伝統」の継承と発展 —楽器と教育のトラキア化とソヴィエト化に着目して—

玉置 彩乃(東京藝術大学大学院)

4. 戦う尺八の誕生 —「新日本音楽」運動から十五年戦争まで—

王 涵宇(一橋大学大学院)

■定例研究会のお知らせ■

◆東日本支部 第139回定例研究会

日時: 2024年4月13日(土) 13:00~14:20

開催方式: オンライン会議システムのZoomを使用し開催

※初めてZoom例会に参加される方へ:

参加にはWebカメラとマイクのついたPC、またはタブレット、スマートフォンなどが必要となります。

参加方法: 事前申込制。下記URLあるいはQRコードより申し込みフォームへアクセスし、事前に参加をお申し込みください。



<https://forms.gle/PrdEtf7BPkpg1RsR9>

申込締切 4月9日(火)

司会 金光 真理子(横浜国立大学)

■定例研究会の報告■

◆東日本支部 第136回定例研究会

日時: 2023年12月2日(土) 14:00~16:15

開催方式: Zoomによるオンライン開催

司会 鈴木良枝(東邦音楽大学)

<共同発表>

東大寺修二会における「法華音曲」の伝承

柴 佳世乃(千葉大学教授)

近藤 静乃(東京藝術大学非常勤講師)

(共同発表要旨)

十一面観音悔過を主軸として、1270年もの間欠かすことなく勤修されてきた東大寺修二会。本行の14日間、初夜と後夜の冒頭の荘嚴作法において、法華経から抜粋した文言に節をつけて唱誦する「法華音曲」がなされている。この法華音曲がいつどのように修二会次第に盛り込まれたかは定かではなく、これまで検討されてこなかった。

本共同発表では、院政期に法華経読誦が芸道化した「読経道」を傍らに置きつつ、この法華音曲を具体的に検討した。法華音曲は、中世に行われた読経音曲の面影を残す現行例として極めて貴重な存在なのである。

1. 読経音曲の相承と東大寺

柴 佳世乃(千葉大学教授)

(発表要旨)

法華経の読誦は、僧俗にわたる信仰に支えられながら、芸能的要素を多分に含んで行われるようになり、院政期に芸道化がなされた。読経道とは、口伝書の嚆矢である『読経口伝明鏡集』(弘安7年(1284))によれば、字声を糺す、清濁を分かち、音曲を習う、という三つの柱から成る『法華経』読誦に関わる芸道であり、師資相承や口伝が存する。

三つの柱のうちの音曲こそ、読経道を芸道たらしめる要素で、特有の「読経音曲」が中世を通じて詠唱されていたのである。それは「四句甲乙」「叩」といった骨格を持つものであった。前近代まで播磨の書写山にて行われていたようだが、現在は伝わっておらず、しかしわずかに東大寺修二会の法華音曲にその片鱗が見出せる。修二会の法華音曲は、読経道の芸態を汲んでいる可能性が高い(柴『読経道の研究』風間書房、2004年など参照)。

読経道の概要と研究の現在とを整理しまとめた上で、東大寺および修二会の読経道との関わりについて、資料を挙げつつ論じた。読経をよくした能読に南都僧の名が見えること、『読経口伝明鏡集』の書写に修二会練行衆が関わっていること、現行の修二会の法華音曲に読経道口伝書に見える用語が用いられていることなどをもとに、読経道と修二会との関連について考察した。

2. 東大寺持宝院蔵『大乘妙典』における「法華音曲」の唱誦法

近藤 静乃(東京藝術大学非常勤講師)

(発表要旨)

東大寺塔頭の特寶院蔵『大乘妙典』は、法華経八巻全二十八品から修二会の初夜・後夜で唱誦される経文を抜き書きし、唱句ごとの配役(一~四)および「甲ニ々」「乙叩」等の曲節名、句点(朱)や節博士を付記して折本一帖に収めた抄本である。奥書によると、明治16年に権中講義の平松晋海師が、(上司)永純師の応需によって書写したもので、以来持寶院で代々護持されている。この『大乘妙典』は、東京文化財研究所芸能部編・佐藤道子担当『東大寺修二会の構成と所作』において全文が収録されているが、音曲構造を特色づける句点の位置と節博士との関係については、一部写真を掲載するのみで詳らかにされていない。このほど、柴佳世乃との共同研究により、持寶院

現住職の上司永照師を通じて『大乘妙典』の閲覧がかない、合わせて、先代の永慶師が昭和27年度修二会に権處世界にて参籠の砌、唱誦法の委細を記した『読経覚書』もお示しいただいた。現行伝承に直接繋がるこれらの資料に基づき、昭和40～50年代修二会の録音記録(東文研所蔵)と照合しつつ分析した結果、おもに次のような特色が見出された。1.法華音曲は、講式や平家のような中世語り物に類似する積層構造をもつ。2.読役で分掌する唱句(曲節)は、序読⇒下叩⇒渡音⇒序読⇒甲二々⇒甲三々…のように一定の原則で推移する。音曲の大半が速めのテンポでリズムカルに独唱されるが、連や相音(句頭⇒斉唱)ではテンポが緩み、一種の段落感が生まれる。3.各曲節には、それぞれ所定の節博士(叩におけるユなど)が出現し、句点の位置とも密接に関わっている。なお、中世の「四句甲乙」の痕跡を遺す「二々」「三々」や「甲乙」の解釈をめぐって、当該曲節内の句数がその原則(2+2,3+3句)に合わず、現行では甲・乙・下に音域差がほぼ無いという結果になった。今後、他の伝承曲や周辺種目にも視野を広げて再検討したい。

本発表は、科学研究費補助金(基盤研究B[21H00505]、「仏教儀礼の音曲復元から見る中世文化の総合的研究」研究代表者:柴佳世乃)による研究成果の一部である。

(傍聴記:山内弾正)

本共同研究は東大寺修二会の「法華音曲」に焦点が当てられ、その伝承過程と唱誦法を確認することで、中世における音曲の様相を明らかにしようとする試みであった。

はじめに、柴佳世乃氏から中世の芸能である〈読経道〉と東大寺の関係について発表があった。〈読経道〉は、大乘経典の中で重要視される『妙法蓮華経』に節を付けて唱える芸道で、平安末期から鎌倉初期にかけて整理されたという。節を効かせた「読経音曲」は僧俗の垣根を超えて広まり、後白河院をはじめとする王権との関係を経て芸道化が進んだ。一方、東大寺においては1200年以上にわた

って厳修される修二会の中で節付きの読経(法華音曲)がなされている。本発表では、〈読経道〉の口伝書が東大寺・新薬師寺の堂司によって書写され、修二会を主催する行者(練行衆)がさらにこれを東大寺塔頭寺院にて書写したことが指摘された。また、東大寺所蔵の文献に〈読経道〉と関連の深い用語が散見されることが指摘された。質疑の中では〈読経道〉で重視される「清濁」が他文献においてオクターブ等の音高差をあらわす事例が指摘されるなど、活発な意見交換がなされた。

続いて、近藤静乃氏より「法華音曲」の譜本である『大乘妙典』(持宝院蔵)の構造分析と、各句に付された唱法の機能について発表があった。ここでは、〈読経道〉の口伝書にある原則や「甲乙下」の指示、朱点と本文の位置関係が主眼におかれ、詳細な分析が行われた。結果、「法華音曲」には講式や平家の語り物などに類似する積層関係が認められることが判明した。また、音域差を指示する用例は認められなかったものの、甲から乙への移動などに一定の音程関係が確認された。今回の分析によって中世における唱誦法の一端が明らかとなり、未だ研究途上にある「読経音曲」の実像を紐解く一歩が示されたといえよう。本共同研究について、今後は魚山叢書本『法華音曲独経叩開書』(播磨書写山円鏡寺蔵)などの分析がすすめられ、判明した唱誦法を基にそれらの復元発表などが企画されている。

◆東日本支部 第137回定例研究会

日時: 2024年2月3日(土) 14:00~16:10

開催方式: Zoomによるオンライン開催

司会 前島 美保(国立音楽大学)

<研究発表>

1. 薩摩琵琶・錦心流のレパートリーとその変遷

曾村 みずき

(京都市立芸術大学)

(発表要旨)

本発表は、近代琵琶楽の一つである薩摩琵琶のうち、明治末期に永田錦心が創始した錦心流を対象に、琵琶歌創作の観点から錦心流隆盛の過程を明らかにすることを目的とする。本研究では、錦心流の琵琶歌本『薩調四絃愛吟集』(以下、『愛吟集』)の収録内容の調査から、楽曲の成立時期・ジャンル分類・構成に注目して錦心流のレパートリーの特徴を考察した。また、『愛吟集』は版によって収録内容に相違があることから、レパートリーの変遷についても検証した。

錦心流創始当初には、永田錦心点譜の琵琶歌集『琵琶歌』(1910、全5巻)が刊行されたが、錦心流の新曲は収録されなかった。また『愛吟集』収録曲のうち、およそ半数は錦心流創始までに作られた既存の琵琶歌であった。新曲の分冊版歌本(稽古本)の刊行時期および詞章内容からは、分冊版刊行後に詞章を再検討したうえで『愛吟集』に収録した経緯が把握され、永田錦心は質の高い錦心流の定本を目指して『愛吟集』を編纂したことが確認できた。レパートリーのジャンル分類の内訳をみると、叙事的な内容が中心で、源平合戦や近代戦争(日清・日露戦争)、太平記を題材とした楽曲が多く収録されていた。楽曲構成の分析からは、錦心流の新曲では複雑な曲節構造の琵琶歌が比較的多く作られており、劇的な展開を意識した創作状況がうかがえた。そして『愛吟集』の、とくに戦前本(一水会本

部発行、1913~30、全8巻)と戦後本(錦心流琵琶全国一水会本部発行、1974~2000、全5巻)を比較すると、近代戦争関連楽曲は戦後本で多く除外されており、戦後の情勢を考慮した収録状況が推察された。

以上より、錦心流創始後まもない時期は、永田錦心は従来の薩摩琵琶歌を用いて自身の音楽性の普及に努め、音楽表現面において流派の確立を図った。その後、流派独自のレパートリーを蓄積していった過程において、物語性のある琵琶歌が求められたことを背景に、歴史的な出来事を題材とした「叙事の歌」を多く新作し、音楽性に富んだ構成の琵琶歌を創作した。

(傍聴記: 薦田治子)

発表者は、薩摩琵琶・鶴田流の研究を手始めとして、歴史をさかのぼる形で、鶴田流に先行する錦琵琶や錦心流についての研究を進めてきておられる。錦心流は、明治末年に永田錦心が創始し、薩摩琵琶の全国流行の中心となった流派である。今回は、そのレパートリーを、歌本類を中心に同時代の雑誌や会報などの記述も参照しつつ、明らかにした研究の発表であった。

錦心流の琵琶歌本の出版は多く、その書名も錯綜しており、状況は複雑だが、それらを幅広く収集し、わかりやすく整理分類して提示し、その中で、錦心流の定本ともいふべき『薩調四絃愛吟集』をとりあげ、その内容を主題や時代に応じて分類・紹介し、さらに時期のことなる3つの版の比較からその変遷に言及する。

なお、当時の作品の「人気」の有無の判断の仕方、錦心流琵琶歌の作詞者3人の作品は琵琶以外にも広がっているかどうか、明治新曲を撰取する際に詞章の改訂があったのかどうか、錦心自身にどの程度能の素養があったのかといった質問があった。

2. 日本近世中期の儒学者による「楽」の歴史研究の諸相

中川優子

(東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程)

近世日本の儒学者たちは、これまで注目されてきた楽律の研究には必ずしも従事しなかった者を含め、彼らの理想とする聖代の先王が定めた「楽」(古楽)と日本の雅楽の関係性を考究するにあたり、前者がその後の中国においていかなる展開を辿ったかという問題にしばしば言及した。本発表では近世中期を中心に、これらの「楽」の史的展開にかかわる理解の様相を整理することで、近世中期の音楽思想の俯瞰を試みるとともに、これまであまり光が当てられてこなかった新井白石の雅楽研究の当時における位置づけを考える一歩とした。

前提として、近世前期における「楽」や雅楽の研究を概観し、熊沢蕃山や貝原益軒が先王の「楽」の後の展開にもいささか見解を述べていること、また中村惕斎を先駆とする楽律研究の影響として、漢代以降の雅楽再興の歴史への理解が育まれていったこと等を確認した。次いで近世中期の儒学者としてまず新井白石を取り上げ、彼が日本や中国の「楽」の歴史を考究し、とくに晩年の論においては、秦漢以後の雅楽はすべて先王の定めた本来の「楽」とは性質を異にするとして、古楽の継承そのものに懐疑的な姿勢を示したことを指摘した。他方、荻生徂徠の楽律研究を参照すると、聖代の古楽はその制度(律)において六朝まで遺存され、それが完全に失われるのは唐代であると述べていることが再確認された。なお今後の展望を述べるとして、日本における「楽」の歴史を体系的に論じた太宰春台の言説の一部を参照した。

考察として、近世中期においては「楽」の歴史にたいする理解が進められるなか、とくに新井白石は楽律とは異なる視座から「楽」の歴史研究を深め、それは先王の定めた「楽」にたいする相対的な視座を含むことを指摘した。また新井白石と荻生徂徠については、これまで知られてきた

日本の雅楽の源流にたいする見解の相違に加え、中国における「楽」の展開にかんする歴史観の相違があることを指摘した。今後の展望として、これらの「楽」の史的展開への理解と、日本の音楽文化にたいする歴史的な理解の様相との関係を明らかにする必要があることを述べた。

(傍聴記:田中有紀)

近世日本の儒学者は、中国三代の「楽」(古楽)がどう保たれ失われ再興されたかを議論した。近世前期の熊沢蕃山は古楽が日本雅楽の一部遺存するとし、古の礼楽に通じる意義を見出した。中村惕斎は、古楽は秦代に廃れ、漢代に雅楽として再興したと考えた。貝原益軒は、古楽は失われ時代ごとに「新楽」を作るとし、雅楽実践を重視した。中期の新井白石は、古楽との直接的な遺存関係だけでなく、日本雅楽の歴史的な機能を重んじた。荻生徂徠は、古楽の音律は六朝まで遺存し唐代に失われたと考えた。太宰春台は、古楽を留める唐から伝わった日本の楽は、古楽を多く残すとした。本報告では、「楽」研究が楽律や経書・史書等の考究により深められ、その中で新井白石が、楽律学とは異なる視座から、楽の相対的な機能に注目した点が、明快に説明された。今後史料のさらなる分析が期待される。

■会員の声 投稿募集■

1. 次号締切: 2024年5月20日 (6月下旬発行予定)
 2. 原稿の送り先および送付方法:
東日本支部事務局
E-mail: tog.higashi@gmail.com
 3. 字数・書式: 25字×8行以内(投稿者名明記のこと)
 4. 内容:会員の皆様に知らせたいと思う情報
 - (1) 催し物・出版物などの情報
研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会などの情報。
 - (2) 学会への要望や質問
支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。
- ※原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきますので、ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

■定例研究会発表募集 (7月例会)

東日本支部では、会員の皆様による活発な研究活動のため、定例研究会での研究発表を募集しております。

発表をご希望の方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記したファイルを添付の上、4月30日までに東日本支部事務局にメールにてお申込みください(tog.higashi@gmail.com)。発表希望を提出後、1週間経ても東日本支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが再度ご連絡ください。

なお、2024年7月例会はオンライン開催とする予定です。

■東日本支部委員会からのお知らせ■

『東日本支部だより』は、第63号(2023年11月号)より、印刷・郵送を停止し、学会ウェブサイトから配信しています。最新号は、学会メーリングリスト(ML)で告知するとともに、そのURLを送信します。学会MLに参加していない方はQRコードから登録フォーム(<https://qr.paps.jp/19Xb>)にアクセスし、メールアドレスを登録してください。また、『東日本支部だより』の郵送を希望される場合は、支部事務局(tog.higashi@gmail.com)へ直接ご連絡ください。上記のML登録フォームで「郵送を続ける」にチェックを入れた場合も、必ず支部事務局までご連絡くださいますようお願いいたします。



■編集後記■

今月号支部だよりでは、12月例会と2月例会の報告をお届けします。原稿をご執筆いただきました皆様に心より御礼を申し上げます。

東日本支部では、今後も研究発表や企画など皆様からのお申し込みをお待ちしております。本誌での「会員の声」にも情報をお寄せいただき、積極的にご利用ください。次号の発行は6月下旬を予定しております(TM)。

発行: 一般社団法人 東洋音楽学会 東日本支部

編集: 早稲田みな子、横井雅子

清水(松浦)春菜、村治学、森田都紀

〒190-8520 東京都立川市柏町5-5-1 国立音楽大学

音楽文化教育学科 音楽情報専修 早稲田研究室気付

E-mail: tog.higashi@gmail.com
